

2023 年 11 月 14 日
早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター・1F 廃炉の先研究会
ふたば未来学園中学校・高等学校

第 7 回・1F 地域塾「1F 廃炉の現状と将来を考える」
議事録

開催日時：2023 年 9 月 9 日（土）14:30-18:00
会場：ふたば未来学園、Zoom ミーティング
参加者数：69 名（会場 61 名、オンライン 8 名）
総合司会：小磯匡大
ファシリテーター：崎田裕子

プログラム

14:30-14:40 開催にあたって：塾生の皆さんへのお願い
松岡俊二（塾頭）
14:40-15:10 座談会: 1F 視察の振り返りと 1F 廃炉事業への問い
司会: 崎田裕子
15:10-17:00 少人数グループ（5 名以下）による「対話の場」

(10 分休憩)

17:10-17:55 全体会
司会: 小磯匡大・崎田裕子
17:55-18:00 1F 地域塾の今後の予定など
松岡俊二(塾頭)

1. 開催にあたって

松岡（塾頭）：添付 PPT 資料参照

2. 座談会

高校生 A: 今日の 1F の視察は 3 回目か 4 回目で、前回は去年の 11 月だったと思う。毎回視察するたびに、事業の動きや現場の説明、さまざまな変化に気づくことができる。これらの小さな変化が積み重なって、廃炉作業が徐々に進んでいること、そして復興に向かっている実感がある。一方で、今日は仮置きや廃棄物処理に関連した言葉を多く聞いた。廃棄物処理は避けて通ることのできない課題であり、社会全体で緊急かつ真剣に議論されるべきだと改めて感じた。

高校生 B: 今日、私は初めて福島第 1 原発に立ち入った。これまで映画や写真、資料を通じて原発の様子を理解してきたが、実際に現地に行ってみると、写真ではわからない多くのことがあると思う。たとえば、廃炉作業が進む中で、1200 人以上の作業員が近隣で働いていること、そして私たちも特別な服装なしで近づけることを知ることができた。全身マスクや防護服が必要な状況は過去のもので、廃炉作業が進んでいることを感じた。ただし、2011 年 3 月 11 日の出来事を思い起こさせるような、当時の

車両が放置されていたり、新しい建物が建設されている様子も見受けられ、新旧の対照が混在した独特の雰囲気があった。

高校生 C:私は初めて 1F を見学し、廃炉資料館で事故当時と現在の写真を見せてもらった。1、2 号機、3、4 号機の変化に驚いた。安全性の向上を感じつつも、1F を訪れ、説明を受ける中で、新たな問題に気付かされた。安全性と危険性のバランス、そして安全性の基準について考え始めた。安全な方向に進展している一方で、ある意味で危険な方向にも進んでいると感じた。安全性を確保するためにはどうすればよいのか、という疑問が残った。

高校生 D:私は原子力に関して興味があって、今日 1F を見に行けたので、嬉しかった。情報発信という言葉について、自分から原子力施設を見に行く人は少ないという話があって、より良い情報の発信は重要だ。

漁業者:以前、福島第一原発の視察に行った経験があった。煙突の撤去作業を見学し、今回も行く予定だったが、台風の影響でキャンセルし、後悔している。トリチウムの放出に関しては、日本国民の理解が想像以上にあり、風評被害も少なく、良かったと感じている。廃炉については時間がかかると予想され、自分が見届けることはできないかもしれないが、今の若い人たちにはそれを見ることができるとも思えない。若い人たちには今日のことを覚えて、将来の考え方を形成してほしいと願っている。

高校生 A:廃棄物処理は避けて通れない重要な問題だ。しかし、これは産業にも影響を与え、多角的な側面を持ち、廃棄物に関する古い固定観念を打破し、これが福島だけの問題でなく、社会全体の問題であることを認識する必要がある。私たち一人ひとりが積極的に関心を持ち、議論に参加する必要があると思う。国や社会全体で、この問題にどう向き合い、どう行動するかを真剣に考えるべきだ。

正直に言えば、私は原子力、廃棄物などの問題を考えることが面白いと思う。それは、自分が住む地域の問題だけでなく、自分に関係があるというだけでなく、共有し、問題を解決するために努力することそのものが魅力的だと思っている。しかし、この感覚を持っていない人も多い。持とうとしない人もいれば、持つ機会すらない人もいるだろう。私の理想としては、社会全体で、人々が興味を持ち、考えてみたいと思わせるような話題として、これらの問題を位置づけることが重要だ。

高校生 B:今回、1F にこの服装で入れたこと自体は廃炉が進んでいることを示すと思う。1F の原子力立ち入りエリアに近づくと、放射線量は 1 ミリシーベルト以下になっていて、進展を感じた。最近、燃料デブリの写真や映像、また処理水の放出が報道されるなど、断片的なニュースは進捗ごとに報道されている。しかし、これらの断片的な情報を繋ぎ合わせた全体像はあまり発信されていないように感じる。実際には、2011 年 3 月から現在までの進捗や働いている方々の労働環境など、実際の状況も話題にすべきだ。現地に行かないとわからない側面もあるが、全てが現地での体験に依存するわけではない。これらの情報がオープンに発信され、地域の人々にとって身近な存在になることで、より深い理解が生まれるのではないかと考えている。私はいわき市に住んでいるため、比較的近い立場にあるが、それでも必要な情報が入ってこない現状があり、情報発信がまだ不十分であると感じる。

高校生 D:もっと情報発信すべきだと思うが、今の日本では政治よりもマスメディアの方が信用できるとし、マスメディアに同調する傾向がある。マスメディアよりもインフルエンサーとか SNS とか、個人の発信する情報を信じる傾向が強くなっていると思う。

高校生 C:安全性向上の取り組みは確かに進展している一方、廃炉作業や廃棄物処理、燃料デブリの取り出しに伴う危険性も増加している。現在の段階では、安全確保のために遮断や新たな設備の増設など

が必要であり、どの方向に進めば安全が確保されるのか、具体的な方針が未だ確立されていない状況が危険を伴うと感じられる。

漁業者:情報にアクセスし、分析する能力を持つ人は少数であり、多くの人が情報を得る方法は限られていると感じている。教育がその鍵であり、マスメディアやSNSよりも教育機関が情報提供において主要な役割を果たすべきだ。教育を通じて、情報にアクセスするスキルや批判的思考を身につけ、情報の価値や信頼性を判断できる力を養うべきだと思う。

塾生:本日、高校生の皆さんが提起した論点は、福島の問題や復興において非常に重要だと私たちも認識している。学生会議を通じて、東電の関係者や他の高校生との議論や意見交換の場を持つ、異なる視点を持つ人々と交流することはエンパシーを感じ、共感を生む上で非常に重要だと考えられる。そのためには、適切な場作りが不可欠だと思う。

塾生:今週の月曜日に、私は朝日新聞の朝刊で処理水の放出に関する記事を執筆し、全国面で掲載された。その記事では、東京電力と政府がどのような安全対策を施しているのか、海水のモニタリングや規制委員会の活動について詳しく紹介した。中国から様々批判があつて、読者が安全性について知りたがっている情報を丁寧に提供した。読者からはさまざまな意見が寄せられ、広報のようだという批判的な意見もあったが、処理水の安全性に疑問を持つ人々にとって、これまでにない機会だったという肯定的な反応もあった。情報発信の方法について議論があり、受け取り方は人それぞれ異なると思う。しかし、私はメディアの役割をしっかりと果たすべきだと考えて、今日のような場で意見を聞くことが重要だと感じている。

崎田(副塾頭):教育に関しては、現代社会においてさまざまな課題が浮かび上がっている。これらの課題を解決するためには、次世代がこれに真剣に関心を持つことが不可欠。教育の中で、次世代の皆さんに積極的に関心を持ってもらうために、どのようにアプローチしていくかが非常に重要だと感じる。

漁業者:漁業者の視点から言えば、私たちは週に1回、福島県で獲れた魚を提供し、数十か月にわたりセシウムなどの検査を行っている。ここ数か月間、高い放射線数値は検出されていない。また、自ら獲った魚についても、各港で簡易的な検査を行って、50ベクレルを超えるものは市場に出さないようにしている。私たち漁業者は、地道にこれらの情報を発信し続け、教育の基盤を築く一環としている。これからも魚を捕り続け、検査結果を公開し、一般の人々が情報をどのように受け取るかは彼ら次第であり、情報の公正な発信が重要だと思う。

東電関係者:実際に現場を見学することは、テレビや新聞、SNSなどで得られる情報とは異なる、具体的な進捗状況や新たな課題に気づく機会となると思う。私たちは今後も積極的に現場見学の機会を提供し、皆様からのご意見を参考にさせていただきながら、進捗状況や安全性について正確な情報を発信していく。廃棄物の問題は放射性廃棄物だけでなく、重金属や化学物質など、様々な要素に関わる複雑な問題。それぞれの基準や影響度合いも異なる。これらの問題を解決するには、皆様とともに情報共有を行い、透明性のある情報を提供することが不可欠。今後もこれらの問題を含めて、引き続き精力的に情報発信を行っていく。

崎田:実際に視察した際に、処理水で飼育されているヒラメが食べられるのかという話が出た。原子力施設で飼っている魚は食べてはいけないとか、そういうルールがあるのだろうか？

東電関係者:法律的な枠組みの中で、今日敷地内に入る際、ゲートをくぐったわけが、一つのゲートはセキュリティ目的のゲートで、もう一つのゲートは放射線管理区域に入る場所だ。放射線管理区域内で

は検査が行われており、このエリア内で生き物を飼育し、それを食べることができるのかという問題は法律的に非常に難しい問題。現在飼育しているヒラメについても、その問題を含んでいる。一方、先月からは処理水を外部環境（海洋）に排出しており、ヒラメの飼われている水も外部環境と同じ処理水であることから、その水で飼育されたヒラメは将来的には食べることができる可能性があるかもしれない。今後の議論を踏まえつつ検討していくと思う。

全体会

グループ A: 情報発信に関して、細かい情報を伝えるべきだという意見と、情報をわかりやすくまとめて伝えるべきだという意見が出た。特に消費者が難しい情報を理解することができない場合、情報を選別し、分かりやすく伝える必要があるという意見があった。

教育に関しては、単に細かい数字や技術だけを伝えるのではなく、比較対象や映画などの具体的な材料を使って、わかりやすく教育を行うことが大切だという意見が出された。

グループ B: 私たちは廃炉地域の継続と地域の活性化の重要性について話し始めた。活性化がなければ廃炉にも意味がなく、逆に廃炉がなければ地域の活性化も難しいという視点から出発し、賠償金や地元の人々の暮らしに対する意識の不足が議論され、若い世代と地元の人々が意見を交換し、意識を高めることが重要だという意見が出た。

もう1つは情報の大小。情報は小さくて濃密なものと、大きく広がるが希薄になりがちなものの2つの形態があり、どちらをどう使い分けるべきか、そして私たちの役割として、学んだことを伝えていく方法について話し合った。感想や意見を伝える方法には課題があり、それをどう克服するかについても議論が行われた。

グループ C: 教育の場では、原子力問題について友人間で議論が難しいという現実があり、教育の場でどのように意見や理論を伝え、議論を促進するかを考えた。専門家の答えを教えることよりも、学校での議論においても、お互いの意見を尊重し、情報を提供し、自ら考えるきっかけを与える教育が効果的であるとの意見が出た。

原子力のことは多くの学生にとって興味を持つきっかけを見つけるのも難しいという課題がある。例えば、映画好きな高校生が福島フィフティを通じて原子力に興味を持つようになったというような自身の趣味や興味を通じて、この問題に関心を持つのは一つの方法である。教育現場でも、教師などの指導者が生徒たちに興味を持たせ、楽しみながら学んで、原子力に関する議論を行うことが必要だ。

グループ D: まず情報発信について、ネット上では正確でない情報も多く、自分で情報の正誤を判断するのは難しいという意見が出された。そのため、1F 原発に実際に赴いて自らの意見や考えを持つことが重要であり、特に若い世代に廃炉のプロセスを理解し、関心を持ってもらう必要がある。

2 点目として、原発の廃炉プロセスに関して、原発の廃炉には時間がかかる中で、将来的には安全でクリーンな技術革新を通じて、新しい産業として発展させ、プラスの方向に変えていく必要があるという意見が出された。企業や次世代の人々が関与し、廃炉や原発のマイナスのイメージをプラスに変えるための取り組みが必要だ。

グループ E: 情報の出し方について2つの要点が議論された。まず、情報は出ているものの、その名前が堅苦しくて親しみやすくないと、市民の側から理解されず、信じられない可能性があるという意見が

出た。名前の選定と情報の扱い方が重要で、堅苦しい表現では受け入れられない可能性が高まる。また、情報を受け取る側がどれだけの時間を割いてくれるのかも問題であり、話題をわかりやすく扱わないと、受け取り手が時間を割いてくれない可能性がある。

次に、教育に取り込むという議論については、教育において強制という言葉が適切でないという意見が出され、半強制的や強制的なアプローチによって、異なる立場の意見を両論併記することができ、教育的な効果が大きい可能性があると考えられた。半強制的なアプローチについて、どのレベルの学生が対応できるのかについても議論された。

グループF:私たちのグループでは、安全性と危険性についての話題から始めた。科学的な視点だけでなく、感覚や経験による感じ方も大きな影響を与えるという点に注目し、視察で1Fに近づくと線量が増えることに対する不安を感じる人とあまり感じない人がいて、この感じ方の違いは慣れといった要素が大きいのではないかとグループで話し合った。環境や教育の要素も関わってくると感じ、情報を伝える際に適切な取り組みを考える必要性についても議論した。

特に教育や環境の文脈では、情報伝達の際に慎重でなければならないという認識があり、廃炉の情報を伝える際に、堅苦しい表現や形式的なアプローチでは、特定の層以外には伝わらない可能性があると考えた。伝える方法について検討する際には、受け取る人々に適したアプローチを考える必要があるという結論に至った。最終的なまとめとして、小さなステップから実践していくことが良い方法である。

高校生B:今回の廃炉についての討論は、非常に貴重な機会であり、情報交換と議論というような場が存在することは、個人的に非常に意義深く、お互いにとって重要な経験だと感じた。参加者は興味を持っていることが前提であるため、興味を持たない人々に対して情報を伝える方法が今後の大きな課題となる。これからは情報の入り口を広げ、より多くの人々に理解してもらえることは重要だと思う。人々が興味を持つきっかけは個々に異なるため、多くの入り口を提供することが重要だと思う。これは全世代に向けた取り組みであり、大人たちだけでなく、子どもたち、特に高校生や小学生に対しても、廃炉に関する興味を持つ機会を広げることが重要だ。どんな形でも構わないが、廃炉に関する情報の入り口を広げ、多くの人々がこのテーマに興味を持つことができるようにしていくべきだと思う。

高校生D:廃炉や処理水排出に肯定的な意見を持っているが、このディスカッションを通して反対意見や中立的な意見を聞くことができ、自分の考えが整理され、広がる機会となった。この経験は非常に価値あるものであり、自分の視野が広がったことを嬉しく思っている。

高校生C:情報の伝え方について、東電が用意した動画に関してBGMの使用が指摘され、それを使わないようにしたという話を聞いた時に、堅苦しくする必要はないと思った。情報は正確に伝えるべきだと思うが、興味を持ってもらうことも重要であり、どちらを優先すべきか迷った。2回目の話し合いで、多くの大人からの意見を聞いたが、私は福島県内でまず話し合い、理解を深めなければならないと感じた。他の人が気にしないのであれば、あまり重視する必要はないのではないかと思います、福島県内の人たちが理解し合うことが先決だと考えた。

高校生A:廃棄物などの処理が進んでいくために必要な社会的な議論と、それに対する興味やポジティブな感情を持つことの重要性ということについて議論をした。今日の議論は話の対象が面白いと思った私の感情とその価値観を繋げてくれる部分があると思う。興味を持つ人を増やす方法が重要であり、他の人にどう伝えるのかについても議論があった。グループでの議論では、教育の観点から福島や原発の話題を探究型学習の一環として位置づけることについて話し合われ、半強制的な方法で触れさせることで

興味を持つ人が増える可能性があるという意見も出された。特別視するのではなく、興味の一部として広めていくことが大切だと感じた。

塾生:今回、私は2つのグループで共通のテーマである情報について話し合った。情報に関して学ぶことが多く廃炉に関する情報やその他の関連情報が誤解され、広まってしまう可能性について懸念を感じた。誤解が広まれば最終的には争いなどの深刻な問題につながる可能性もあると考えている。私たちがすべきことは、正しい情報を理解し、発信すること。地域塾での経験はその意味で非常に貴重であり、情報を広めることは一人で出来ることは限られているため、多くの人々で行うことが大切だと感じた。今後は、身近な人々に廃炉について知識を広めるために情報を発信しようと考えた。

漁業者:改めて皆さんとお話をする、福島の漁業問題について、当事者である私は気づかない側面があることに気づかされた。外部の人々がそれを指摘すると、新たな視点から考えることができ、有意義な会だったと思う。

崎田:後半の議論で、みんなで共有した興味を持つきっかけを増やすことの重要性が浮き彫りになった。面白い方法は今日の主要なテーマだが、提案したいのは、この議論から生まれた面白いアイデアを、時折プロジェクトチームで実現し、経験を積み重ねながら改善を図っていくこと。それによって、みんなで共同体験を持つことができ、より面白い成果が生まれるのではないかと考えた。

【会場の様子】



以上